

CONTENTS

- ◆川紀行 ロシア沿海地方を訪ねて
- ◆我が家の珍虫シリーズ①ムネアカナガタマムシ
- ◆エコキッズキャンプ
- ◆今月の調査風景
- ◆今月の一枚
- ◆編集後記

URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

川紀行 ロシア沿海地方を訪ねて

間野 隆裕



沿海地方

ウスリー川

今年の8月10日から1週間、プライベートではあるがロシア沿海地方を訪れる機会に恵まれた。沿海地方は極東の最南東の日本海に面し、西は北朝鮮と中国の国境、北部はハバロフスク地方に接する、面積約17万km²(北海道の約2倍)の大きさである。この沿海地方は寒冷なロシアの中においては最も温暖な地域で、極東最大の面積3100km²(琵琶湖の約4.6倍)を有するハンカ湖があり、そこから流れ出た川は、その東部のウスリー川と共に北に流れアムール川に合流する。

出発当日名古屋から新潟、ウラジオストックへと飛び、陸路でウスリースクを経てハンカ湖に向かった。途中広大な草原にはオミナエシやワレモコウ、ヤナギランなど草原性植物が繁茂し、モンゴリナラの林が続く。川は蛇行が激しく、日本の様な強固な堤は見られない。そして至る所に湿地が点在し、川から離れるにつれ草原性植物が多くなる。ここでは草原と湿地が一体のものとなって風景を形作っている。ハンカ湖に流れ込むこの川は決して大きくないのだが、草原も含めた氾濫原は広大で、その氾濫を避けるかの様に小高くなった地域に集落が形作られていた。ロシアでもこの沿海地方は最も人口密度の高いところであるが、13人/km²と日本の340人/km²とは比べものにならない。人間による自然改変のインパクトが極めて低

いのであろう。

ハンカ湖周辺には広大な湿地帯が形成されている。ここは各種鳥類の繁殖地・飛来中継地として重要で、そのうち面積1360km²(釧路湿原の約7倍)をサンクチュアリーとして保護している(ハンカ湖自然保護区)。その一部を車で通った際、行けども湿地という景色に圧倒された。北の一部が中国領となっているハンカ湖は最大深度10mと極めて浅い湖で、その年の降水量などによって面積が大きく変化するという。強風での湖床攪乱のためか、鉛色に染まった湖面に浮かぶ遊泳者は奇異であった。

ハンカ湖をあとにして東部日本海へと向かう。途中標高1600m前後の峠にさしかかった。ここは南北に連なったシホテアリニ山脈の懐で、この山脈が東西の分水嶺となっている。この分水嶺の東部に降った雨は数10km後に日本海へとそそぐが、西部の雨はウスリー川からアムール川となって延



オミナエシの草原

日本海

々1000km以上の旅をすることになるのだ。この付近は冬季の平均気温-20℃と沿海地方でも最も寒冷な地域で、多くのシラカバが湾曲変形していた。聞くところによると冬季の降雪の重みによって変形するのだという。自然の猛威を目の当たりにした思いであった。

対岸に日本があるという郷愁に駆られた日本海では、多くの海水浴客が絶句するほど透明度の高い海で余暇を楽しんでいた。その海岸にはハマナスやマツムシソウの仲間をはじめワレモコウやナガボノシロワレモコウ、ナデシコの仲間、ベンケイソウの一種など様々な植物が見られ、ベンケイソウ類を食草とする稀少種のクロツバメシジミも飛んでいた。その植生は北海道東部海岸を思い起こさせる、素晴らしいものであった。

沿海地方に見られた広大な大自然。それは日本

の中部山岳や北海道と共通性の高いものであったが、トラなど大型哺乳類の生息を可能にする多様な自然がそこにはあった。夜はヌカカの大飛来に閉口し、林内では脳炎を起こすダニの脅威を意識しつつの調査であったが、川と湖沼、またそれらが織りなす湿地・草原と豊かな森林を実感する事が出来たし、素晴らしい体験と共に本来の河川環境を考える良い機会であった。



ベンケイソウの一種

クロツバメシジミ

(まの たかひろ、

豊田市矢作川研究所 総括研究員)

我が家の珍虫シリーズ①

ムネアカナガタムシ

山中 洋

私の家は豊田市のはずれ、もう2~300mで知立市や刈谷市という、田畑や町工場の多い田舎の住宅街にあります。自宅には草木を沢山植えてありますので、当然昆虫達も多くやって来ます。そんな中で、とっておきの私の自慢の昆虫達をこれからご紹介していきます。

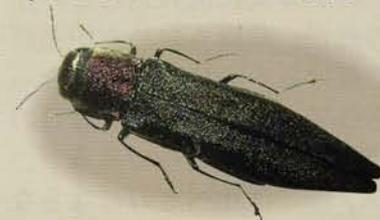
「ムネアカナガタムシ」という、体長1cmほどの小さな玉虫の一種がいます。あのぴかぴか虹色に光るヤマトタムシの仲間で、この種は胸（昆虫研究者は前胸と呼びます）が赤い金属光沢を持っていて光り輝く事からそう呼ばれています。この小さな玉虫は他の地域では割合見られるのに、何故か愛知県下では採集されたことのない、地域別に見れば珍種だったのです。それが、豊田市の自然基礎調査の折、庭のエノキの木で腕試しでもして見るかと思い、葉を捕虫網ですくっていた時の事です。「ナガタムシ」という仲間の一種が、偶然捕虫網に入りました。「えっ！こんな住宅地で??？」と思いながら網をのぞいて見ると、何と胸が光っているではありませんか！「ムネアカか？ でも・・・」同じナガタムシの仲間で、同じように胸が赤く光る「ケヤキナガタムシ」という種がいて、この種はケヤキの葉上に見られる種類なのですが、ムネアカナガタムシと非常によく似ていて、慣れないとルーペや顕微鏡でなければ区別出来ない種類の玉虫です。まさか自宅の庭で愛知県初の昆虫が採れるものかと思

い、図鑑で確認してみましたが、やはりムネアカナガタムシそのものです。そもそもムネアカナガタムシはエノキの葉上で見られ、ケヤキナガタムシはケヤキの葉上に見られるのが普通なのですが、自宅近辺にはエノキは沢山あってもケヤキは植えられていないのです。市街地から外れているため、街路樹にもケヤキはありません。そこで、甲虫の研究家に見て頂いたところ、やはりムネアカナガタムシで、しかも愛知県初記録だと断定されました。まさかと思うのと同時に、自宅でもそういった昆虫がいることもあるのだな、と感心しました。

しかし、この例は偶然ではなく、その後も我が家の庭には珍しい昆虫が沢山棲んでいたのです。そのことについては今後の機会に述べますが、一見何の変哲もない住宅地でも、自然が少しでも残っていれば、昆虫達もそのたくましい生きざまをまざまざと見せてくれるのだなと思い、改めて昆虫の凄さを思い知らされました。ちなみに今でも正式な記録ではムネアカナガタムシの愛知県の記録は我が家の1頭のみです（三河昆虫研究会の会報に記録済み）。貴方も自宅付近に住んでいる昆虫達に接し、昆虫の素晴らしさを自ら体験してみませんか？ そこにはきっと素晴らしい感動が待っています。

——続く

(やまなか ひろし、名古屋昆虫同好会 会員)



ムネアカナガタムシ

エコキッズキャンプ

中條 義氏

8月6・7・8日の3日間、「2004とよたエコキッズキャンプ」が開催された。同キャンプは来る2005年の愛・地球博の関連プログラムである「国際こども環境会議」をみすえて、子どもたちの健全な育成と環境学習の推進を図ることを目的に、2002年から毎年行われており今回で3回目である。

今年は、「集まれキッズインディアン!」「集まれ鳥人!」「集まれ川ガキ!」の3つのプログラムが用意され、豊田加茂広域圏内の小学4・5・6年生に応募をかけ、各プログラム40人ずつの120人が参加した。私達の担当は「川ガキ」で、矢作川において身近な自然である川との触れあい方、楽しみ方を体験するプログラムだ。

1日目、8セットの捨て針を作成して子どもと一緒に川に仕掛ける。夜は宿泊場所である六所山の総合野外センターで子ども達と一緒にご飯を食べ、その後、川の自然についての勉強会と翌日に行う魚釣りの準備として仕掛けを子ども達に教え作らせる。

2日目、前日仕掛けた捨て針の回収・ガサゴソ・魚釣り・あゆの塩焼き・釣れた魚のから揚げ・竹寒天・手作りの筏下りと豊富なメニューをこなし、いたれりつくせりのスーパーキッズ養成キャンプだ。

正直これでいいのかな? という疑問はあったが、矢作川研究所員による「川の話」を熱心に聴く子ども達の顔、釣りの仕掛けを作る真剣な姿を見ているうちに、私の疑問など露と消えてしまい、



私が受け持った班の女の子達に「明日はこの班が一番たくさん釣ろうな!」なんて言っている始末だ。仕掛け作りが一番早く出来て班のメンバーそろって大声で「出来た!」って言った時の自慢げな顔、捨て針に大うなぎが掛かって狂喜乱舞している顔、魚が釣れてはしゃいでいた顔、釣った魚のから揚げを美味しそうに食べている顔、世界中で一番の栄養剤をもってしても、この子達の笑顔にはかなわない。

子ども達と一緒に過ごして感じた事は、昔の子どもと今の子どもの違いは、物があふれ過ぎていて、欲しいと思った物が比較的安易に手に入り、独創性や創造性を伸ばしづらい世の中に生まれてしまった事を除けば、感性の部分においてはほとんど、いや、全く変わらないと安心したのは私だけだろうか?

(ちゅうじょう よしじ、矢作川学校教頭、
矢作川天然アユ調査会会員)



今月の 調査風景

8月9日(月)～14日(土)

フィンランド南部のラハティ市にて開催された、第29回国際陸水学会に参加してきました。私自身も、「河川と湖沼の復元および管理」のセッションで、「ダムで分断された河川におけるアユの釣果の変遷」というタイトルでポスター発表をおこないました。海外の研究者とは、言葉の壁もあり十分なコミュニ



ケーションがとれたとは言い難かったのですが、水辺環境の復元に関する世界各地の多様な研究内容をまのあたりにでき、貴重な経験になりました。(山本)

8月27日(金)

昼間に開催された「天然アユ調査会友釣り大会」で釣れたアユをいただき、夕方、古巣水辺公園でききアユ会をしました。例年ですと、矢作川の場所によって1日の釣果がばらつきアユの数が揃わないのですが、今年は豊漁とあって、どの地点も20尾を上回る釣果でした。「ききアユはすべて釣れたて！」の贅沢な会となりました。

評価は、香り、肉のうまみ、脂の程度、皮のかたさの程度、容姿・色の5項目を対象とし、優れている(5点)、まあまあ(3点)、悪い(1点)で採点しました。



集計した結果は次のとおりです(ききアユ票の回答者数19人/参加者数37人)。(内田)

- | | |
|------------------|------|
| 1位(古巣) | 358点 |
| 2位(豊田大橋) | 306点 |
| 3位(西広瀬) | 281点 |
| 4位(養殖:当日使用した親アユ) | 280点 |
| 5位(葵大橋) | 267点 |

編集後記

今年は天然アユの遡上数が多かった、空梅雨で冷水病にやられなかった、日本のあちこちの河川が数々の台風によって氾濫しているなか矢作川は天候に恵まれていた、中流域では6月上旬の台風によってカワシオグサ繁茂が少なかったことなど、アユ漁にとってよい条件が重なっていたのでしょうか、釣師の顔がほころんだ夏でした。(内)

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。

今月の一枚



ヒガンバナ

(二〇〇三年九月二十七日 豊田市大内町 太田川流域 吉鶴靖則撮影)